

## たかが年賀状というなけれ

年末の忙しさの中で年賀状を書くことは、毎年苦行となっています。その苦し紛れに、いつから年賀状の習慣が定着したのだろうかと調べてみました。平安時代に上流階級の間で年始の挨拶を書状にして伝えたのが、年賀状のはじまりらしいのです。江戸時代、正月に挨拶にいくという日本古来の風習を行なえない遠方の場合に飛脚を用いて、さらに明治時代には飛脚便に変わって郵便制度がこれを代行するようになったようです。著名人の年賀状収録集をみると、恭賀新年の文字と名前だけの、文字どおり襟を正して読まなければならぬような明治時代のものから、大正時代に入ると現在のような家族写真やデザイン画を賀状にしているものが多くなってきており、当時の社会文化的背景が伝わってくるようです。

とはいえ、きっと元旦の朝には届いていないだらうなと思いながら書き、さらに年が明けてから書いているにもかかわらず、新年の朝、届いた年賀状を読むのは、私にとって最高の楽しみでもあるのです。1年に一度年賀状のやりとりだけの交流もたくさんあります。卒後2年目、大学ではじめて主治医として関わった、当時20代だった患者さん、25年も経った今は当然50歳を過ぎているはずなのですが、私の脳の引出しにしまわれているあの時のままの表情で年賀状を書いている姿が浮かぶのです。「便りがないのは元気な証し」ということばもありますが、年賀状でお互いの身の確認をし合っている場合は、賀状が届かないと心配になってくるものです。

今年の年賀状で印象的だったのは、先輩からのもので「分娩を取り止め、外来だけにしました」という複数の賀状、「心カテを行なわなくなりました」「ゆっくり診療できる職場にかえました」という賀状でした。50歳を過ぎて一人で分娩も手術もこなし、365日宅直をしなければならない産婦人科診療を続けるのは難しいでしょうし、リスクの高い診療を「burn outする前に」縮小回避することを決断したことも理解できます。また年賀状に、地方の勤務地の住所と、札幌の住所を並列して書いてあるのも今年は目につきました。おそらく家族と離れて地域医療を守るために単身勤務している仲間も多くいることが窺えます。いずれも現在の厳しい医療情勢の中で仲間の医師たちが、懸命に働いている姿が浮かび上がってきました。

記憶は、完成された画像としては記憶されておらず、素材としてたくさんの引出しにしまわれている。そのバラバラの記憶の断片は、トリガーによって一瞬にして新たに再構成されるという。一年前の年賀状ファイルからはらりと現れた一枚、お能の三番叟の写真を背景に入れて、自分になまけるな・おこるな・いばるな・あせるな・くさるな・おごるな・右条々自戒自守と墨で書かれた年賀状。この賀状の5ヵ月後、肺癌で去ってしまった差し人は、学位をとってまだ間もない頃、研究テーマであった子宮内膜症の実験を細々と続けている私のところに時々現われては20年もの間、新しい情報を置いてってくれたものでした。彼の専門領域のステロイドの話、彼を介するネットワークにある研究者達の話題、おしゃれで品の備わった白髪の横顔、一緒に食事した料理の色や味すらも蘇ってきます。引出しの奥にしまいこまれた記憶の断片が、あっという間に連鎖しながら、好奇心を忘れず科学する夢をいつも持ち続けよ、という強力なメッセージになって現れたのでした。

今年の年賀状は、将来の記憶のトリガー。たかが年賀状というなけれ。